

## 移民によるホームランド母村への「遠隔地参与」

—農村からの中国朝鮮族移民を事例に

京都大学文学研究科 許燕華

### 1 目的

この報告の目的は、連続の視点から、中国朝鮮族の農村社会維持と移民をみることで、移民による「遠隔地参与」の実態を明らかにすることである。移民研究と農村研究は別の枠として認識され、移民研究では移民の活動の話、農村研究では農村の人口減少など変化の話ばかりに注目してきた。移民との関連で関心を集めているのは過疎化によるケアの問題で、ホームランドの農地運営問題を移民と関連してみる試みはほとんど行われなかった。現象としては一続きのもので、連続の視点から取り上げなければならないのに、従来の移民研究も農村研究も連続性については手薄く描いてきた。本稿は、従来の移民研究と農村研究という二つの研究領域の狭間の欠片ともいべき相互作用に着目した。

### 2 方法

そこで、データとして、2011年8月から2014年3月まで6回にわたる中国延辺の朝鮮族村落への調査のなかで、韓国での追跡調査が可能であったAムラを選定した。方法としては、半構造化インタビューの方式で、Aムラにおける朝鮮族全世帯と移動したムラ人に対する追跡調査を行う。

### 3 結果

分析の結果は下記である。第一、「遠隔地参与」、これを可能にするのは、中国の戸籍・農地制度の保証、韓国の移民政策緩和、発達した通信技術である。第二、ムラを離れた朝鮮族は、借主選び、貸借金額、契約延長可否などの農地貸借をめぐる問題で、ムラ内外と情報交換や交渉などを行っている。第三、ムラを離れた朝鮮族は、ムラの自治運営の選挙、行事に意思表示し、各種補助金と保険を受け取っている。第四、ムラを離れた朝鮮族は、移民同士、ムラに残っている朝鮮族、新しく流入して農地を貸借している漢族と冠婚葬祭など個人的交流を行っている。

### 4 結論

以上からわかるように、物理的にムラを離れている朝鮮族であるが、韓国で移民として生活しながら、空間を越えて、ホームランドの農地、自治運営、ムラの公私行事に「遠隔地参与」を行っている。現代の中国社会が経験するグローバル化の荒波のなかで、国境を越えて移動する朝鮮族、とりわけ農民が、いかにして農地と農村社会を維持再生産しながら、トランスナショナルな生活世界を構築するのかは、グローバル化を周辺世界の生活者の視点でとらえる「下からのグローバル化研究」にとって重要なヒントを与えてくれる。

### 文献

ジョン・トムリンソン、二〇〇〇『グローバリゼーション 文化帝国主義を超えて』片岡信訳、青土社